朝日新聞
DIGITAL

英語信仰は「壮大なムダ」、言語学者の危惧 「日本語こそ国際語」

有料記事

聞き手・石山英明　2023年6月12日 8時00分

コメントプラス

佐倉統さんなど 2件のコメント

青山学院大学の永井忠孝教授=2023年2月、東京都港区

学校での英語学習の早期化が進み、社会人でも英語を学ぶ人は多くいます。ですが、青山学院大学の永井忠孝教授（言語学）は、そうした風潮に疑問を感じると言います。「英語の害毒」（新潮新書）という著書もあり、「ある意味、日本語が一番の国際語だ」と語る永井氏に話を聞きました。

――すぐに仕事で使うわけでなくても英語を学ぶ人は多く、学習熱が高まっているように感じます。

「まるで強迫観念のようです。私は外国語を学ぶ必要がないとは思っていません。ただ、いまのありようは、国を挙げて壮大なムダをやっているように感じます。仕事で使う英会話は、中学と高校で学んだ読み書きの基礎があれば、わりとすぐになんとかなります。仕事で実際に必要になってから勉強すればいいのです。一度落ち着いて、本当にいま英語を勉強することが必要なのか、冷静に自分に問いかけた方がいいと思います」

「英語に時間を割くということは、他の必要なことを学ぶ時間が減るということです。英語も大事ですが、国語も数学も歴史も大事です。仕事で必要なことも英語だけではないでしょう。そこまで考えて、てんびんにかけて決めるならいいですが、英語習得のいい側面しか言わない英語産業やメディアに、あおられている面もあるのではないでしょうか。英語を特別視しすぎているように感じます」

――子どもの教育のために海外に移住する人もいますね。

「子どものときの海外移住は、真の意味で英語が身につくケースもあり、そうすれば武器にな

りえます。ただ、そう簡単な道ではないことは、事前にちゃんと理解しておく必要があります」

――どういうところが簡単ではないのでしょうか。

企業の英語公用語化、「第2波」到来？「通訳雇った方が安いけど」→

「子どもが英語を話せるようになったとしても、授業の内容を理解できていないこともあるのです。言語能力には『会話言語能力』と、より上位で抽象的な思考などに関わる『学習言語能力』があります。二つの言語がともに会話言語能力にとどまる人を『セミリンガル』、両方とも学習言語能力まで獲得した人を『バイリンガル』と呼んでいます。バイリンガルは武器になりえますが、なるには相当な努力が必要になります」

――公教育でも、小学校から英語を学ぶようになりました。

「小学校までは母語でしっかりと考える力を養うことが大切で、中学校から、いまの英語の授業時間の一部を割り振って、第3外国語まで学ぶのがいいと私は思います。さまざまな言語を学ぶことは、世界を多面的に見る視点を養うことになります。ところが、いまの英語一辺倒は偏った世界観をもたらしていると思います。せっかくアメリカに留学しても、『グローバル=アメリカ』と逆に視野を狭めて帰国し、日本や日本語を見下すようになった学生もいます。複数の言語を学べば、他の国にも目が向くようになるでしょう」

――イヌイット語が専門で、英語を受け入れたイヌイット社会の変化を現地でご覧になったそうですね。

「私はアラスカの大学院に留学し、留学後も何度も現地調査に行きました。自分たちを守っていた自分たちの言語という壁がなくなった結果、郵便局長や学校の先生、村に1軒だけある店の経営者など、有力者はほとんどが白人に代わりました」

「メディアが『英語=格好いい』というイメージをふりまき、あこがれの職業はハリウッド俳優や芸能人になりました。みんな英語を話します。やがて、『自分たちの言葉は国際的に通じず、ダサい』と見下す人が出てきました。日本に戻って英語を教えるようになった15年ほど前、村と日本の姿が重なって見え、危機感を覚えました」

――日本語の持つ価値をもっと評価するべきだと主張されていますね。

「日本では特に明治以降、海外の情報を翻訳して取り入れてきた歴史があり、翻訳の価値、社会的地位が高い。翻訳された文章を読んで、世界にはこんな人がいて、こんな物語がある

のかと、驚いた経験はないでしょうか。いま生きている人との交流という点では英語に分がありますが、古今東西の亡くなった人とも読書を通じて対話できるのは、日本語のたいへんな強みです」

「日本文学研究者のドナルド・キーンはこう言っています。『もし君たちが世界のありとあらゆる文学作品を読みたいと思うなら、日本語を勉強しなさい』と。著作『果てしなく美しい日本』でもこう書いています。『欧米のほとんどすべての重要な作品は日本語に訳され、時にはひとつの作品に三つか四つの異なった翻訳版が試みられた。今日では、外国語を知らない者が母国語でより多くの世界文学を読めるという点で、日本語に比肩しうる言語はないといわれる』。中国の作家、魯迅は今から約100年前に、そのような日本語の強みを知って日本語を学び、西洋の書物を日本語訳から中国語に重訳しました。そう考えると、ある意味で日本語が一番の国際語とさえ言えるかもしれません。それを当の日本人が分かっていないのは、非常にもったいないことです。日本語は、活字離れで失われるものがとりわけ多い言語です」

――機械翻訳の精度が向上するなか、外国語を学ぶ意義はどこにあるのでしょうか。

「言語にはその集団の物の見方が集約されていて、言語を学ぶことでその文化を味わうことができます。その重要性は機械翻訳がいかに進歩しようと、色あせるものではありません。実用的な部分を機械翻訳に任せられれば、その分、文化的なことを純粋に味わうことに注力できるようになります」（聞き手・石山英明）

コメントプラス　いま注目のコメントを見る

佐倉統（東京大学大学院教授＝科学技術社会論）2023年6月12日10時32分 投稿

【提案】見出しに違和感があって読み始めたら、まったくまともなことをおっしゃっていた。永井教授は英語の早期教育も語学留学も完全に否定しているわけではなくて、それらの機会を…続きを読む

小林恭子（在英ジャーナリスト）2023年6月12日20時58分 投稿

【視点】非常に興味深いインタビューでした。

…続きを読む

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.